

21世紀、日本は大丈夫か

撮影・大森正憲氏 (S29年)



題字・松尾金蔵書
発行
修猷館同窓会東京支部
事務局
〒101 東京都千代田区神田須田町
1-2-1 カルフル神田 5F
(株)フソウキャリアサービス内
TEL.5294-6221



日刊工業新聞社会長
藤吉 敏生(昭26卒)
撮影・大森正憲氏

世界的な大競争時代の中にあつて、日本は今、国全体を覆う閉塞感で将来への目標を失いかけていっているように思える。

第二次大戦後の荒廃から見事に立ちあがり、今日の繁栄を築き上げた国全体のエネルギーはどこへ行ったのか。私はあのエネルギーが消えたとは思ってはいない。再びエネルギーを燃やすことは可能だと信じている。問題は誰が、何が、その発火源となるかである。この発火源を早く、しかも計画的に創らなければ二十一世紀の世界での日本のポジションがみえてこないといえは言い過ぎだろうか。

今の日本は政治、経済、社会、教育、どれをとっても戦後五十年間続いたシステムが通用しなくなっているのではない。その背景にあるのは、いずれのシステムも長い間の右肩あがりの経済成長を前提に構築されている点を指摘せざるを得ない。しかも、その改革へのエネルギーが乏しいところに問題がある。

九十一年にバブルがはじけて始まった今日迄の長期不況は、これ迄と違って明らかに構造的な問題から派生しているようである。実質GDP成長率で見ると、九十一年度から景気が悪化しているのはつきりする。その以前は五%成長だったものが、九十一年度に三・一%に減速し、九十二年〇・四%、九十三年〇・二%、九十四年度〇・五%、九十五年度二・三%と推移した。九十二年から地価が下落し、緊急経済対策、公定歩合の相次ぐ引き下げなど一連の景気対策を取り続けても三年間ゼロ成長が続くという、わが国にとって戦後初めてという異常事態が続いているのはご承知の通りである。

これ迄の循環的な景気下降であれば日銀の公定歩合の引下げ、大型補正予算に

21世紀の新規・成長市場分野
市場規模(兆円)



(出所) 産業構造審議会

大幅な財政投入、し続けたのとは違うのである。

私がここで指摘したいのは、今の閉塞感を一掃するには日本も米国の実施した目標を定めた大胆な改革を実行するしかないということである。資源のない日本は資源を海外から輸入し、これを最適に配分して効率のよい経済成長をはかることで今日、経済大国になった。しかし、そのパターンが通用しない時代に入ったことを日本国民全体が認識しなければならぬのではない。その上で、緊急課題として①技術革新による新産業の創出②高度工業化への脱皮、といった二十一世紀型産業の構造改革への明確なビジョンを作るべきである。

今の日本人は知識があっても知恵がない、農耕民族特有の総ヨコ並び状態にあるのではない。偏差値教育の弊害とはいわないが、二十一世紀、日本が激しい世界の荒波を乗り切り、世界の信用を取り戻すには待望民族的な発想が必要ではないか。

それは各人が個性を発揮し、あまり周りをキョロキョロすることなく自己主張し、堂々と一人歩きする勇氣と決断を身に付けることだ。今、日本は東南アジア諸国だけでなく、世界中からその進路について注視されている。今こそ、日本古来の伝統ある文化を守りながら、柔軟な発想と行動をとらなければ、二十一世紀世界の中で孤立する恐れさえする。

インドとパキスタンを訪ねて

アジア経済研究所主任調査研究員
深町 宏樹(昭37卒)

昨年九月十月、三週間ほど政治経済調査のためインドとパキスタンを訪れた。丁度五年ぶりのインドでは私は浦島太郎になっていた。九一年からの経済自由化で、家電製品等々があちこちの店で売られ、新しい五つ星ホテルはシングルで室料だけでも一泊三百五十ドルという超高額。これが本場にインドなのか?という感じだった。

もともと、経済自由化につきものの汚職でラオス前政権が、四月から五月にかけての総選挙の結果、退場することになったという事実は、これまた紛れもない事実だ。これまた紛れもない事実だ。これまた紛れもない事実だ。

この地理的事情のためパキスタンは国土防衛上、建国初期から文民政治家よりも国軍が強い発言権を持っていた。一九七一年に第三次印パ戦争でパキスタンが完敗し、バングラデシュが独立した。残された西パキスタンは地政学上デリケートな位置にある。事実、米ソ冷戦後期

館友だより

米大統領選を取材して

西日本新聞ワシントン支局長
渋谷 民夫(昭40卒)

長かった九六年米大統領選挙は、予想どおりクリントン大統領の楽勝で終わった。

「長かった」とは言っても、大統領選挙がいつ始まったかは当地の連邦選挙委員会に聞いても分からない。日本のように選挙が公示されるわけでもない。通常、民主、共和両党の大統領候補を選ぶ予備選(二月初旬)に向けた選挙戦がスタートとされ、「三百日選挙」といわれるが、私の取材実感から言えば、二年前の一九九四年十一月中旬には選挙戦は始まっていた。

当時の私の取材日誌にこう記す。その時期に、政党の区別なく選挙を請け負う「米国の選挙

の七九一八九年、西隣の国アフガニスタンに当時のソ連軍十万人が駐留していたため、パキスタンでは国軍の権力は絶対的なものだった。その時期に、当時の軍人大統領が憲法を決定的に「改正」し、自らの大統領権限を絶対的なものにした。彼の死後も、その絶対的権限は維持されている。現在の大統領は文民だが、軍部の政治介入を拒否することはできない。インドと違って、国民の間に民主主義が根づいていないパキスタンでは、悪政は、選挙を通じて解消されるのではなく、大統領の強権発動で内閣を解任することによって解消されるというのがある。このことである。

異は何によるのだろうか。少し歴史を振り返ってみよう。両国は独立前は共に英領インドを成していた。そして非宗教国家としてのインドとイスラーム教徒の国家としてのパキスタンという二つの別々の国として、一九四七年にイギリスから独立した。独立後のパキスタンは、このように一七〇〇キロほど離れた東西に領土(東パキスタンは現在バングラデシュ)を持ち、間にはけんか別れた敵国インドがある。

この地理的事情のためパキスタンは国土防衛上、建国初期から文民政治家よりも国軍が強い発言権を持っていた。一九七一年に第三次印パ戦争でパキスタンが完敗し、バングラデシュが独立した。残された西パキスタンは地政学上デリケートな位置にある。事実、米ソ冷戦後期

参謀」モリス氏を迎え入れたのである。クリントン氏は過去、下院選、知事選で二度の落選経験があるが、この時にカムバック選挙を請け負い当選させたのがモリス氏。以来、クリントン政治のすべての標準は二年後の再選に合わせたのである。

同時期、中間選挙の大勝で勢いに乗る共和党では、実力者が大統領選出馬を表明し始めた。当時の取材日誌には「ドル氏はじめ十数人の候補予想顔触れの経歴コピーが挟んであり、そのページに「十一月末、大統領選始まる」とある。

以後、二年後を目指した大統領と共和党の攻めぎ合いが始まるが、一年四月月後に共和党候補がドル氏にほぼ決まった時点(九六年三月)には勝負はついていて、と言っている。

クリントン氏の勝因は新聞や雑誌が指摘しているように、リベラル路線を捨て保守寄りの中



修猷大文化祭

道路線にシフトしたクリントン氏が「中道志向で生活重視が強調された米社会の主流である白人中間層をつかんだ」点にあり、これに「好調な米経済」が追い風となった。開票日に私が送稿した解説記事の見出しも、「好景気が後押し」「中道路線が奏効」「米国の強さより生活選んだ国民」だった。

共和党の政策をも躊躇なく取り込み、保守中道路線を突き進んだクリントン氏の戦略は、選挙に勝つためには「政治的信念よりも世論調査を優先する」モリス氏の影響によるものであろう。そのモリス氏は選挙二カ月前に女性醜聞が発覚して去ったが、その時はクリントン再選は事実上決まっていた。

この間、共和党は中間選挙大勝の勢いに乗って、保守改革を強引に推し進めてきた。同党右派の改革路線が全面支持された

母校便り

現代修猷生気質

修猷館高等学校教諭 同窓会係 新谷 勉(昭56卒)

月日の経つのは本当に早く、今年の在校生はちょうど私が修猷に在籍していた時に誕生した子供達になります。今年度は三十一クラスで生徒数は千三百名を越えます。男女比は約七対五ですが、一年生についてはほぼ一対一になります。男子クラス、いわゆる「男クラ」はありませんと、二年生の時に男クラであつた私としては残念というか、うらやましいというか複雑な心境です。ないものといえ「モーカー」もです。今から考えると「古き良き時代」の話になつてしましました。現在二年生から理系・文系のクラスに分かれ、それぞれのコースに難関大学志望者のための英数クラスがあります。毎朝や夏の休み中には全員参加での補習授業も行われ、東大、京大等難関大学への合格者の増加をはじめ、進学状況も着実な向上を示しています。

文化祭や運動会をはじめとする諸行事も非常に盛んに行われています。特に運動会の規模縮小が叫ばれる今、生徒の手による運営組織や、タンブリングでの「七ビラ」や騎馬戦・棒倒しの格闘競技はいまだに健在です。三月の「OBによる応援歌指導」は前回で十八回を数え、恒例の行事となつています。昨年、創立二百十周年の記念事業として同窓会の援助により実施された生徒海外研修も今年で二回目を迎え、全学年より選抜されたメンバーにより今年も大いなる成果を収めました。これもまた同窓会の尽力によって実現した二年生全員の県外研修旅行「つくば・東京研修旅行」が今年も八月に行われ、進路選択に迷う二年生にとって、研究や仕事の現場に赴き、その実態を目の当たりにしたこの経験は間違いなく大きな財産となったようです。この場をお借りしてお世話になった先輩方にお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございます。

部活動はその入部率も高く、放課後の校内は生徒達の明るい声で満たされます。中には「部活命」という生徒もいて、自身の昔を見るようで学業成績が心配になつたりします。運動部には女子マネージャーがいて、かけがえのない存在になつています。

さて生徒の気質ですが、全体的に少々幼い感じで、よくも悪くもルーズでした。たかといふか、これは修猷生に限ったことではなく、現代の高校生に共通する所なのではないでしょうか。ただ行事になると持てる力を十二分に発揮するそのたくましさにはいつも驚かされます。慌ただしい学校生活の中でそれぞれが楽しむべきを知っている修猷生は、楽しんでいるように見えるところはいかに「修猷生」といった感じがしたのもしいかぎりです。教員として修猷に在籍する私としては、校舎全面改築を控えて、年々変わりゆく環境の中にあつても決して変わることをない修猷に集う者の持つ「思い」をいつまでも大切に育てたいと思っています。最後に、修猷を見守ってくださるOBの皆様のお健康をお祈り申し上げます。

華のお江戸の修猷健児

東京修猷'97

企・画・満・載

決定 1997.6.13 18:30- 大手町経団連会館 (出口A1、日経ホール隣)

幹事は、よかる会 (46) 事務局: (5373) 0458

修猷ものしり百科

私が体験した中学修猷館から修猷館高校への移行の時代

福田 純也

(昭27卒相当)

年頭ではありますが、東京修猷会々報は年一回の刊行でもあり、戦後の教育制度の大改革に従った中学修猷館から修猷館高校への移行の模様について書いておきたいと思います。常任幹事会の度に「昭和二十三年卒と二十四年卒は同学年はい」との発言がありますが、その解説でもあります。

戦前、中等学校の修業年限は五年制であり、四年修了で上級学校への進学が許されていたが、昭和二十三年三月、修業年限四年制の実施により十五年入学者が二十年五年卒、十六年入学者が二十年四年卒として二年同時に卒業した。この四年卒業制度は二十三年三月まで適用された。

昭和二十一年三月、中学校の五年制度が復活したが、六十三名が四年卒となり、他の四年は五年に進級した。四月、私たちは「福岡県立修猷館」に入學した。旧姓中学校として一年から五年まで揃った最後の年度となった。十一月三日、修猷館同窓会が創設された。

昭和二十二年四月、戦後教育制度の大改革の第一歩として新制中学校が発足し、私たち二年は「福岡県立修猷館併置中学校」二年となった。三年、四年、五年は、中学修猷館の三年、四年、五年であった。私たちは旧制度の中学修猷館に併置された

新制中学校の生徒というわけであった。修猷館では、この年新制中学校への入学はなく、この年度は一年生は居なかったのである。

昭和二十三年三月、五年が卒業したが、この時が、中学修猷館の最後の卒業とされている。また、三年は新制度扱いとなり、形式的に中学修猷館併置中学校卒業生とし、卒業証書が授与された。四月、「福岡県立高等学校修猷館」が発足し、中学修猷館五年卒の三百四十名中、二百三名が三年に、旧四年が二年に編入され、併卒業の旧三年が一年に入學した。私たちは「福岡県立高等学校修猷館併置中学校」三年に進級した。

昭和二十四年三月、「福岡県立高等学校修猷館」の第一回卒業式が行われた。この学年は、前年中学修猷館を卒業し、高校三年に編入され、この時高校を卒業したのである。この年は中学五年卒業が認められ、二年修了の五名が卒業したよしである。私たちは「福岡県立高等学校修猷館併置中学校」を卒業した。

四月に、私たちは「福岡県立高等学校修猷館」に入學した。男女共学制となり、福岡中央、西福岡、第一女子の併中その他から約八十名の美女（波呂喜代子修猷館同窓会事務局長談）が同級生となった。学校区制も実施され、これを巡る話題も多かった。この年、館名（校名）問題が起り、八月、「福岡県立修猷館高等学校」と改称された。

昭和二十五年三月、「福岡県立修猷館高等学校」の卒業式が行われた。高校通算二回目であるが、新校名としては、この時が最初である。四月に、新制中学校の全課程を了えた新入学生を迎えた。

これ以後、修猷館の生徒は「福岡県立修猷館高等学校」に入學し、これを卒業することとなり、男女共学制も、多少の改変はあったにせよ学校区制も続いているのである。

第435回

原口 真智子 (昭45卒) 作家

'96二木会から 講演抜粋

◆作者と作品の間にあるものは◆

―平成7年「クレオメ」で芥川賞候補。主著は「神婚」(立風書房)―

私がまだ学生の頃ですが、『月山』という小説が世に出ました。この作品で、森敦さんが六十二歳で芥川賞を受賞したのです。

私はその『月山』を初めて読んだ時、なんてスゴイ小説があるんだらうと、スケールの大きさに衝撃を受けたんですね。この森敦という人は一体どんな人生を送ってきたんだらうかと、面白いことにそれから十年余り経って、ある文学賞をきっかけに私は森先生とお近づきにな

ることができました。学生時代に受けたあの感動の源を探るチャンスを得たわけです。

森先生という方は、非常な電話魔でありまして、しょっちゅう私の家に電話をかけてこられた。そのおかげで、私はたくさんのお話を教わりましたし、また『月山』という小説に秘められた複雑な構造を知ることができたのです。

森先生は四十年近くの間、何度も放浪を繰り返しているのですが、その中で得た宇宙観のよくなもの、大変やこしい内容なのですが、無理やり一言で言うなら、「一微塵の中に宇宙がある」ということを、月山の美しい自然描写、人物描写の中で表そうとしたのでした。ご興味をお持ちの方は、森敦著『意味の変容』をご覧ください。

しかし複雑に絡み合った思想、構造が、直接小説に出るわけではありません。小説というものは、様々な構造を裏に隠しながら、さらに作者自身をも浄化して、初めて一つの物語世界を創ることができると言えます。だからこそ読者は、自分のものとして感動することができ

るところで、この感動とは一体何なのでしょう。大健三郎氏が『新しい文学のために』という本の中で、「文学の秀れたものは、なにより僕らに励ましを与える」と書いています。確かにそのとおりで、たとえばどんなに悲惨な内容の小説を読んでも、感動し励まされた記憶を皆さんも持ちではないでしょうか。つまり絶望でも描き尽くされていれば、その向こうに何か別のものが見えてくるんですね。

人生の途上で、誰でも絶望せざるをえない時があると思います。でも、その絶望を妥協することなくどこまでも見つめてい

くと、対岸に違うものが見えてくる。可能性というか、希望というか、それを文学は描くんですね。

第441回 宮崎 暢俊 (昭35卒) 熊本県小国町長

◆魅力あるライフスタイルを求めて◆

―小国町は杉の木造建築を軸にしたユニークな町づくり、人づくりを推進して全国から注目を集めている。人口一万、林業・農業中心の典型的過疎の町。八三年から現職―



小国ドーム

都市生活は刺激的で魅力的と思われてきましたが、気持ちの中では、緑豊かな安らぎのある場所であらうと思ってしまうようになってきています。それを地方自治体が叶えられないか、というのが今日の話の中心です。

戦後、経済成長を追求してきた中で、バブルを頂点に成長の善悪が見えてきた、今までは何か違っていたんじゃないか、という気持ちや国民が持つようになってきています。例えば高齢者がリタイアして故郷に戻るといのが多くなっている、価値観、人生観に変化がみられます。どんな生活が夢かと考えてみま

すと一例え、森の中にログハウスを建てて、横には小川が流れている。朝風呂の温泉にはいる。朝食は屋外のテラスで近く

でとれた牛乳、無添加ハムやソーセージ、近くでできたバターとパン、自宅の菜園からの野菜を食べる。仕事をし、芸術に触れ、趣味を楽しむ、たまにはおいしい肉料理をレストランで食べ、酒を飲む。小国に住んでいる人達が、そんな暮らし方をしてみようというのが、今やっていることです。

そのライフスタイルをやっているには、そのような場所を自分で作り出していかなければいけない訳です。自然景観には恵まれているが、人間が作る景観―建築物、河川や道路の構造物―には、これまで美しさやデ

ザイン、日本の風土に合っているかなど、ほとんど考えられていません。行政が「美しさ」をいうことはタブー視されてきました。しかし人が自然から美しさを感じたり、安らぎを感じたりするんだったら、人間が作る物も人の心を満たすようなものを作っていかなければいけないと思います。小国には小国杉でドームや物産館・林業センター・人々の交流のための木造館など多くの建物を、葉祥栄さんを初め何人も建築家によるデザインで作っています。

次に地域を創造的な場所にしなればなりません。山村は新しい魅力を作り出していく努力をしなればいけないと思います。自分達の地域にある資源―農産物、林産物、歴史的遺産、文

化学的活動、雰囲気、芸術家の方々、地域に縁のある人達、地域の風土、そういう全てのものを自主的に活かしていこう、というのが地域作りの考え方です。イベントをたくさんやりま

す。美術フェスティバルを行なう、坂本善三美術館を作り出した。音楽会はほとんど毎週あります。「町を自分達で変え、新たなものに挑戦していこう」という雰囲気や町全体に感じられるようになってきました。小国が気に入って移り住む方々も増えてきました。自分達の努力に外部からの人の力が加わって、小国での暮らしの魅力が増してきていますし、新しい活動もネットワークも広がってきています。ぜひ一度小国に来て、見て

いただきたいと思っています。

(文責・棚町精子S40卒)

福岡から 東京から ESS 創部五十周年を祝う

英語研究会は創部五十周年と英研同窓会創立三十周年を記念して、昭和三十七年卒の石橋靖雄氏ら東京と福岡の卒業生達が協力して、英研の生徒達が使えるように、母校にコンピュータを贈った。東京では創部当時の部長だった浅田寛厚青山学院大学教授(昭和二十二年卒)を招いて記念講演も行なった。

無線部OB会 今年、修猷無線部が出来て50年になり、有志で記念行事を計画しています。詳細は決まり次第、以下のホームページに掲載しますのでご覧下さい。

http://www.higuchi.com/JA6YAF/ また、無線部OBの皆さんや、戦前の修猷ラヂオクラブの情報をお待ちの方はご連絡下さい。 e-mail:ja6yaf@higuchi.com

二木会講演内容

回	月	講 師	話 題
平成7年	435	原口真智子 (S45卒; 作家)	作者と作品の間にあるものは
平成8年	436	西高辻信良 (S47卒; 太宰府天満宮宮司)	天満宮と私
	437	後藤 晃 (S39卒; 一橋大学経済学部教授)	日本経済の現状と課題
	438	藤吉 敏生 (S26卒; 日刊工業新聞社会長)	戦後50年、私の目で見えた企業の盛衰
	439	高岩 淡 (S23卒; 東映株式会社社長)	映画づくり……なんでんかんでん
	440	広渡 勲 (S34卒; 日本舞踊芸術振興会)	あなたも今夜からオペラファンに
	441	宮崎 暢俊 (S35卒; 熊本県小国町町長)	魅力あるライフスタイルを求めて
	442	楠田 喜宏 (S27卒; 安川電機株式会社顧問)	ロボットの夢と現実
	443	田所 愛子 (田所 一秀氏(S44年)夫人)	暮らしの中の色彩学
	444	小柳陽太郎教諭	教育と日本の将来――修猷館での経験を通して

